

とこトーク・ダイアログ

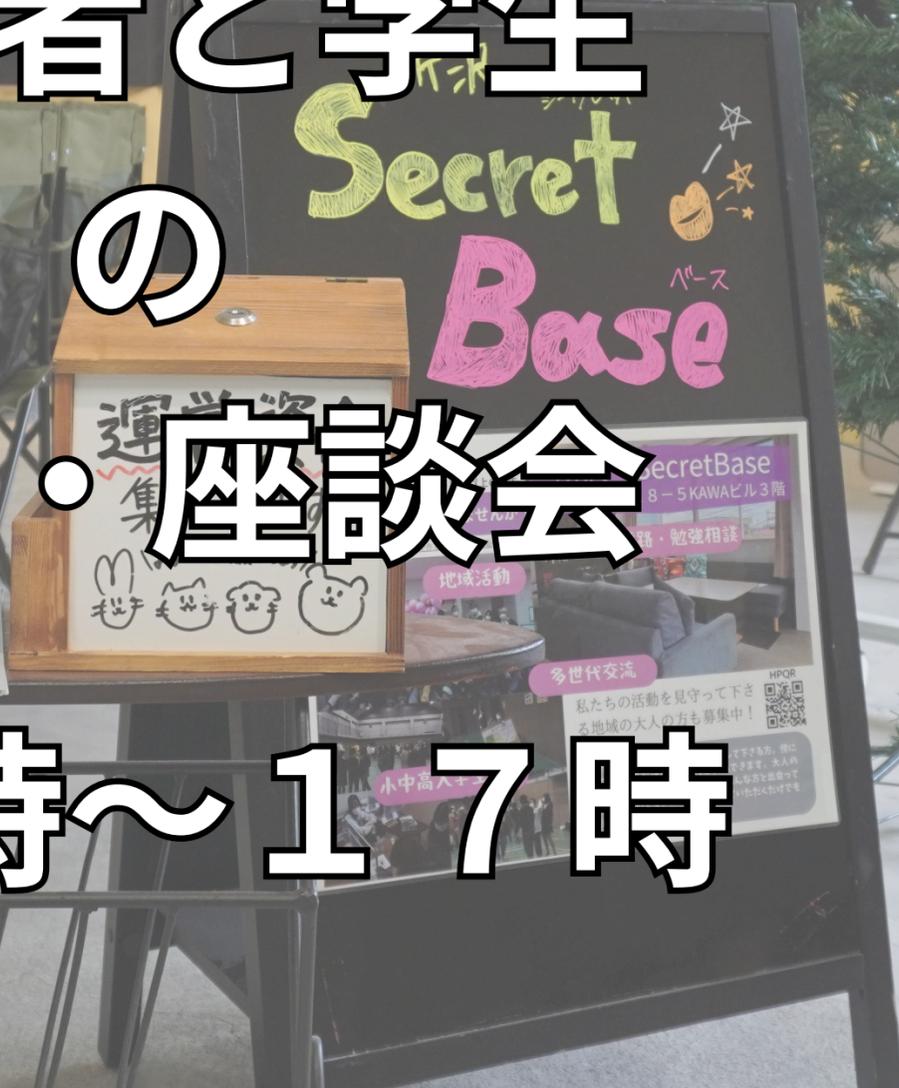
支援者と学生

の

登壇・座談会

13時～17時

HPQR



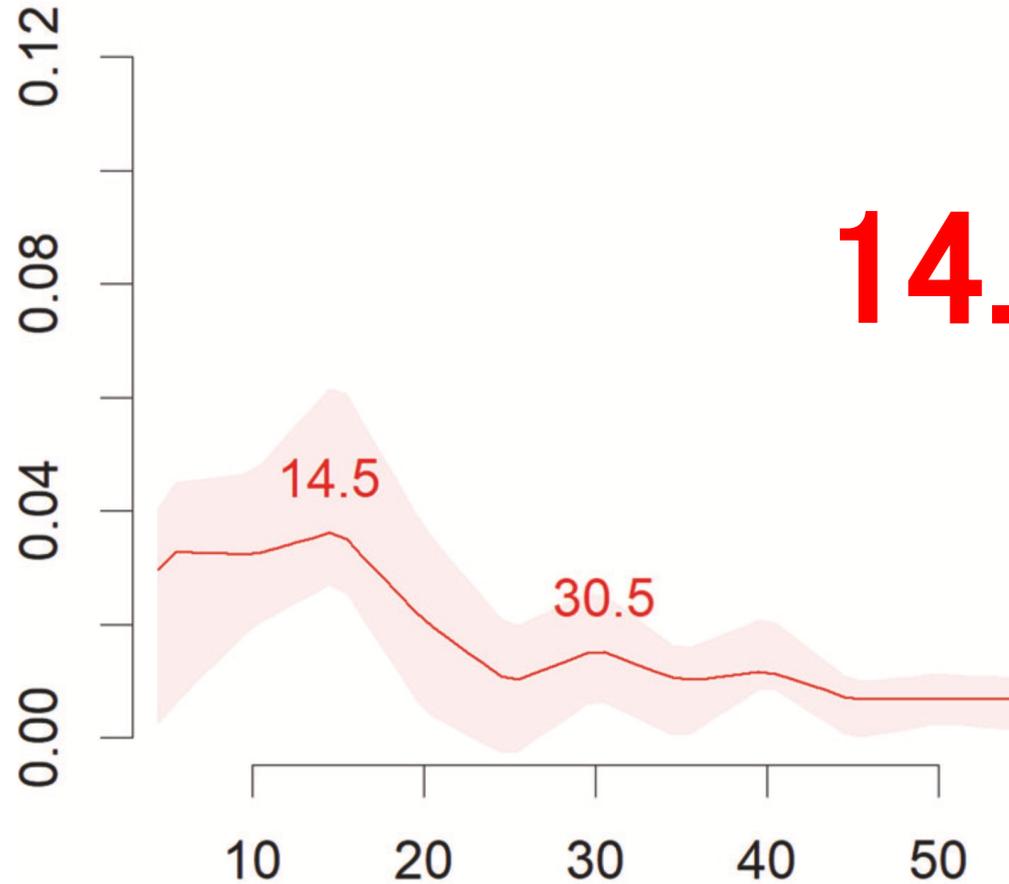
子供の心の健康を守る アプローチ

令和8年3月1日

平沢スリープ・メンタルクリニック

平澤俊之

世界の精神疾患発症年齢



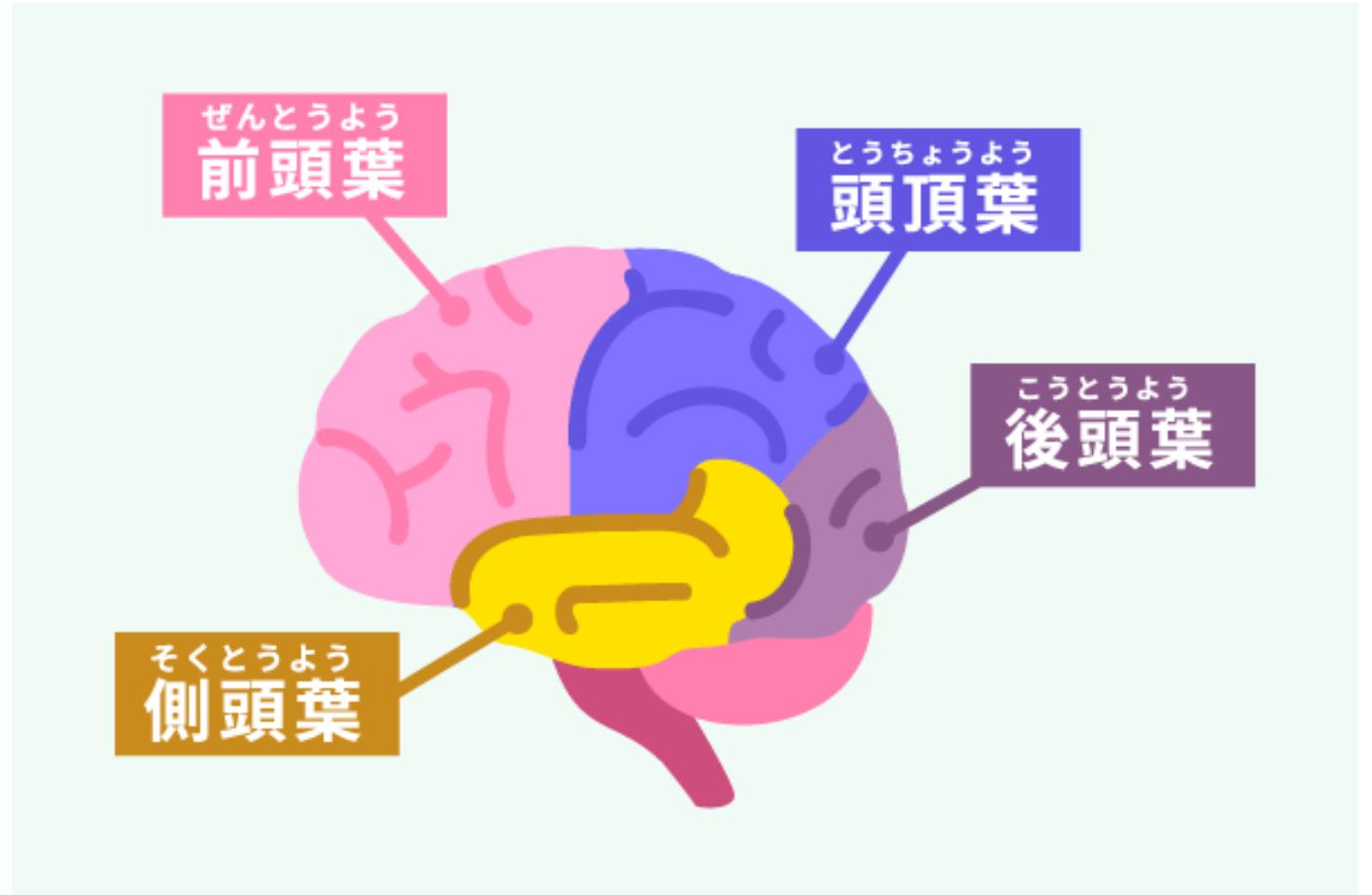
14.5 years old.

Solmi M, et al. Age at onset of mental disorders worldwide: large-scale meta-analysis of 192 epidemiological studies. *Mol Psychiatry*. 2022 Jan;27(1):281-295.

子供の脳は 発達途上

前頭葉の機能: 思考、
判断、感情のコント
ロール、言語、注意、
意欲、そして行動の計
画

→これらが未発達

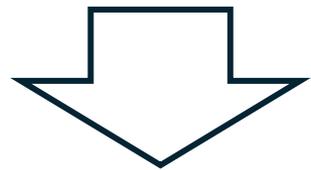


子供からは困りごとを相談しにくい

- 子供から助けを求めることは圧倒的に少ないと考えておく。
- また、その傾向は、子供が抱えている問題が深刻なほど強くなる可能性がある。
- 普段から信頼関係を築き、話し合える環境を作っておく。

常に傾聴を意識する

- 子供の行動や考えの良し悪しを判断せず一旦受け入れる
- 子供の持っている価値観を肯定的に受け入れる、理解する



- 相談できる関係になれる





2026/3/1
とことく・ダイアログ
所沢市保健センター

ToCoCo

ところざわこどものこころネットワーク

防衛医科大学校小児科 今井耕輔



ともに、すごす。
ともに、つくる。
ときに、わらう。



Rare Disease Day
Ready,
Dialogue and
Discovery



深刻化するこどものSOSと、私たちの目指す解決策



The Need

発達・心理的支援を必要とするこどもの急増。

所沢市内で最大

約1,500名

児童が支援を必要としています。



The Gap

医療・教育・福祉の深刻な
リソース不足と「分断」。

施設は点在し、必要な支援にたどり着けない親子が多数存在します。



The Solution

多職種連携ネットワーク
「ToCoCo」の設立。

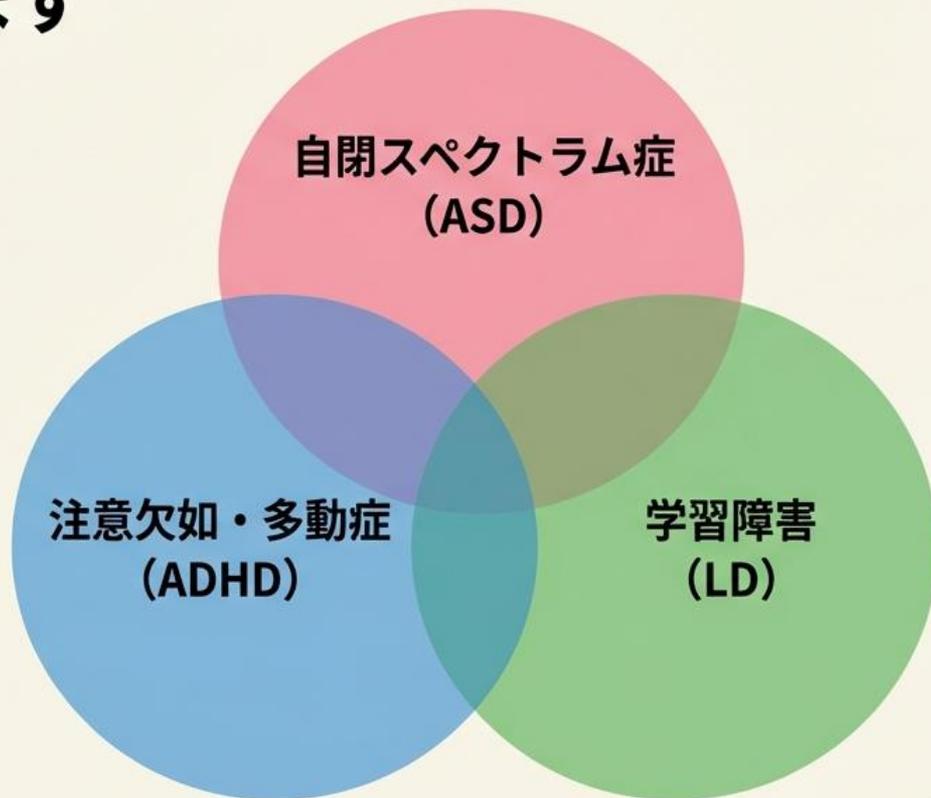
限られたリソースを繋ぎ、
所沢全体で子どもを守る
エコシステムを構築します。

こどもの「こころ」と「発達」の課題は、 かつてなく複雑化しています

自閉スペクトラム症（ASD）、
注意欠如・多動症（ADHD）、
学習障害（LD）などの特性が
複雑に絡み合う現状。

環境的要因の悪化:

スマホ・ゲーム等の長時間のスクリーンタイムが、乳幼児期のアイマの言語発達や認知機能（語彙力やコミュニケーション能力）に悪影響を及ぼすデータも報告されています。



所沢市においても、特別支援を必要とする児童生徒が急増

所沢市の義務教育対象年齢の小児：**24,260名**

そのうち何らかの支援教育が必要と推計される児童：

約700～1,500名

• 特別支援学校対象者：
約173～220名

• 特別支援学級対象者：
約339～897名

• 通級等による指導対象者：
約160～412名

しかし、受け皿となる所沢市の専門医療リソースは圧倒的に不足しています



言語療法が可能な
医療機関

「0か所」

(県内リスト15機関中)



小児科で心理療法が
可能な医療機関

**「わずか
1か所」**



医師の
医師の診察頻度の限界

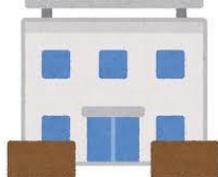
**「2ヶ月に1回
がやっと」**

延べ3,600名の患者に対し、担当医が診られる発達関連患者は約120名。
月に1回の診療すら不可能で、薬（メチルフェニデート徐放剤など）の
適切な処方調整にも支障をきたす危機的状況です。



ところざわこどもこころネットワーク

児童相談所



所沢児童相談所

こども支援



所沢市こども支援センター
(所沢こどもと福祉の未来館)

平沢スリープメンタルCL



所沢市教育委員会

小学校

中学校

高校



所沢小児科医会
参加施設



国立障害者リハビリC

西埼玉中央病院

防衛医大

所沢市民医療C

こども地域NW所沢

埼玉医科大学

小児科

心理士

精神科

早稲田大学人間科学部



防衛医科大学校病院の小児心理・発達・神経・精神関係の体制

2026/4~	月	火	水	木	金
心理士	石井	田島 杉田・川口	杉田・川口	田島	杉田
小児科 午前 午後 (神経・発達・心理)	— 座波	横山 —	— 有坂	黒木 黒木 松本・小林	若松 若松
精神科	—	—	高橋	—	—



今後のロードマップとアクションプラン



2024

キックオフミーティング
(平澤先生との連携開始)、防衛医大新体制
スタート。

2025

所沢小児科医会ベース
での勉強会・情報交換
会(年2~3回)。

2026

実態調査準備・実施、
第1回 ToCoCo ワーク
ショップの開催。

ユニパーク(UNIPARK)

公園から始まる、誰もが「ありのまま」でいられる居場所のデザイン

日本全国に11万箇所ある「都市公園」。そこは単なる空き地ではなく、孤立しがちな現代社会をつなぐ「新しい居場所」になる可能性を秘めています。

3つのUNI (UNIVERSAL・UNIQUE・UNITY) で、地域と人をつなぐプロジェクト。



Instagram



Website

奥原歯科医院

医療法人社団 光志会 奥原歯科医院



医療法人社団 光志会

奥原歯科医院

Okuhara Dental Clinic

小手指の歯科医院・訪問治療

小手指の歯科医院・訪問治療

変わりゆく歯科医の役割

歯医者に求められる役割の変化

小学6年生の虫歯平均：0.47本

- 虫歯の減少にともない、歯科医に求められるものは変わりつつある
- 現在は「医療につながりにくい人」へのケアや「傾聴」が重要な時代へ

訪問治療における 「傾聴」と「関係性」

精神的なケアも欠かせない訪問診療

小学6年生の虫歯平均：0.47本

- 精神障害や生きづらさを抱え、医療から孤立している方々がいる
- 訪問時に話を伺い、カウンセリングのように関係を築くことを大切にす
る
- 気持ちが落ち着くひと時を共有し、安心してつながれる場所を提供して
いく

外見の改善がもたらす一歩

「前向きに生きる」ための一助として

小学6年生の虫歯平均：0.47本

- 前歯の欠けや黄ばみの改善が、患者様の生きる気力につながる
- 自費治療（ホワイトニング等）は、次に進むための大きな助けとなる
- 治療を通じて、その方の「次の一歩」を支えたい

とこトーク・ダイアログ

若者のメンタルヘルスの現状

所沢市保健センターこころの健康支援室の現場から

所沢市保健センター

赤ちゃんからお年寄りまですべての市民が、
健康で生きがいのある生活を続けられるよう
保健・福祉・医療3つの分野にわたるサービスを提供する複合施設

健康管理課

こころの健康支援室

- ・ 予防接種、がん検診など
- ・ 精神保健福祉事業

所沢市アウトリーチ
支援チーム

健康づくり支援課

- ・ 健康相談、各種健康教室講演会など

こども家庭センター

- ・ 妊娠届出、発育発達相談、
- ・ 児童虐待など



こころの健康支援室について

主な業務

① 精神保健相談

来所・訪問・電話・メール

② こころの健康に関する普及啓発

講演会、WEB配信、ガイドブック作成など

③ 各種申請窓口

自立支援医療（精神通院分）、障害者手帳など

障害福祉サービスの申請から支給決定

就労支援、グループホーム、家事援助（ヘルパー）など

④ 権利擁護に関すること

精神障害者への虐待・差別、成年後見制度の利用など

若年者のメンタルヘルスの現状

① 背景（全国的な動向）

- ・ 若年層（概ね10代～30代）においては、自殺は主要な死因の一つ
- ・ コロナ禍以降、不安・抑うつ・孤立感の増加傾向
- ・ SNS・学業・就労不安など、心理社会的ストレスが複雑化
- ・ 早期相談につながらない層が存在

② 本市の状況

- ・ 若年人口は一定規模を維持
- ・ 若年層の自殺者は毎年発生
- ・ 相談は「重症化後」や「家族、庁内関係機関経由」が多い傾向
- ・ 教育・医療・福祉・保健の窓口が分散しており、どこに相談したらよいかわかりにくい

Q1 所沢市の相談状況は

● 精神保健相談件数推移

	R1	R2	R3	R4	R5	R6
電話相談(延べ人数)	5,516	7,082	8,028	8,060	8,326	8,724
来所相談(延べ人数)	884	894	1,067	865	929	995
訪問支援(延べ人数)	907	916	1,186	1,078	1,042	1,097



● 若年者の新規相談件数(実人数)

	0-9歳	10-19歳	20-29歳	30-35歳	若年者 合計	新規相談件数(全 体)	若年率
R3	4人	192人	171人	87人	454人	1,141人	39.8%
R4	6人	138人	125人	73人	342人	876人	39.0%
R5	5人	115人	118人	64人	302人	715人	42.0%
R6	6人	97人	177人	78人	358人	844人	42.0%
R7	5人	18人	32人	26人	81人	210人	39.0%



※令和7年度は、令和7年4月～6月までの件数

Q2 所沢市の自殺者数の状況は

(厚労省 地域における自殺の基礎資料より抜粋、一部加筆)

年度	総数	20歳未満	20-29	30-39	40-49	50-59	60-69	70-79	80歳以上	不詳
R7自殺者数	43	3	4	9	5	5	5	8	4	0
構成割合 (%)	-	7	9.3	20.9	11.6	11.6	11.6	18.6	9.3	0
若年層割合 (%)	-	37.2			23.2		30.2		9.3	
R6自殺者数	56	3	8	9	8	9	9	6	4	0
構成割合 (%)	-	5.4	14.3	16.1	14.3	16.1	16.1	10.7	7.1	0
若年層割合 (%)	-	35.8			30.4		26.8		7.1	
R5自殺者数	51	3	7	7	11	11	2	5	5	0
構成割合 (%)	-	5.9	13.7	13.7	21.6	21.6	3.9	9.8	9.8	0
若年層割合 (%)	-	33.3			43.2		13.7		9.8	
R4自殺者数	58	5	5	5	11	16	4	8	4	0
構成割合 (%)	-	8.6	8.6	8.6	19	27.6	6.9	13.8	6.9	0
若年層割合 (%)	-	25.8			46.6		20.7		6.9	
R3自殺者数	45	0	8	2	13	9	3	6	4	0
構成割合 (%)	-	0	17.8	4.4	28.9	20	6.7	13.3	8.9	0
若年層割合 (%)	-	22.2			48.9		20		8.9	

- 自殺者数はほぼ横ばい減少傾向にあるが、若年層の死亡率は増加傾向である。
- 自殺に至る前段階における支援が必要な状況になっている。

Q3 なぜ若年者のメンタルヘルス支援が必要なのか？

- 5人に1人が、生涯のうちに何らかの精神疾患にかかる
- そのうち70%は25歳以下で発症する
- 精神疾患の多くが20歳代半ばまでに発症するとの知見がある
- 全国的にも若年者の自殺者数が増加している
- 若年者の死因の第1位は自殺である
- メンタルヘルスの不調は、社会生活に大きく影響する
- 早期治療・支援が必要にもかかわらず、受け皿がなく治療が受けられない状況
- 思春期に対応できる保健機関・医療機関が少ない（専門性が高い）

⇒ 早期介入により発症の防止が可能

Q4 若年層の相談の特徴は？ どのような内容？

- 不登校、ひきこもり
- 家族関係
- 対人関係
- 金銭問題（借金、浪費、困窮）
- 就労（就職活動がうまくいかない、長続きしない、不適応）
- 自傷行為
- 依存

若年層の相談の特徴として、単一ではなく

メンタルヘルス不調 + 複数の心理社会的困難 がある

メンタルヘルス不調や障害に関する 行政相談窓口

18歳到達・学校から離れると
「心配」「不調」レベルで
相談できる窓口がぐっと減る

部署名	こども未来部 こども支援センター(委託)	学校教育部 学校教育課 健やか輝き支援室	教育センター 教育相談室	学校相談室 (スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー)	こども未来部 こども福祉課	健康推進部 保健センター 健康管理課 こころの健康支援室	福祉部 障害福祉課	狭山保健所
対象者	18歳未満の ➢ 発達障害やその心配のある子ども	市立小中の児童生徒	➢ 学齢児～18歳までの子ども	➢ 学齢児～18歳までの子ども ➢ 学校に在籍していることが前提	18歳未満の ➢ 知的障害 ➢ 身体障害 ➢ 精神障害(発達障害を含む)	原則18歳以上の ➢ 精神障害(発達障害を含む)	18歳以上の ➢ 知的障害 ➢ 身体障害	全年齢の ➢ 精神障害
内容	➢ 発達障害に関する相談、療育	➢ いじめ、不登校、非行問題、学級運営に関する相談	➢ 不登校、登校渋り、学校生活全般、発達障害及びその心配に関する相談	➢ 学校、家庭生活の様々な相談	➢ 障害福祉サービスの支給決定が中心	➢ 障害福祉サービスの支給決定 ➢ 発症前からの精神保健相談	➢ 障害福祉サービスの支給決定が中心	➢ 精神科救急 精神保健相談
専門職配置	➢ 公認心理師 ➢ 作業療法士 ➢ 言語聴覚士 ➢ 社会福祉士		➢ 公認心理師		➢ 保健師	➢ 精神保健福祉士	➢ なし	➢ 保健師 ➢ 精神保健福祉士

こどものメンタルヘルスに関する現状と課題

① 見えにくい

早期発見の難しさ

本人がつらいと言語化しにくい

周囲からは「反抗」「怠け」「性格」に見えやすい

不登校・問題行動・身体症状として表面化してから気づかれることが多い

⇒ 症状が出てから対応になりやすく、予防・早期介入になりにくい

② つながりにくい

相談先の入口がわかりにくい

医療・福祉・教育・就労・・・どこに行けばよいかわかりにくい

周囲の目：受診・相談のハードル

本人も相談の必要性を認識しにくい傾向もある

支援機関があることと、つながれることは別

こどものメンタルヘルスに関する現状と課題

③ 使いにくい

■子ども本人が相談しにくい

「知られたくない」「怒られたくない」「このくらいなら大丈夫」

相談＝大ごとになる不安 相談時間・場所が本人の生活導線に合わない

本人にとって使いやすい入口（匿名性・安心感・身近さ）が不足している

■保護者支援が弱くなりやすい

保護者自身が疲弊・孤立している 「どう対応したらわからない」

精神科等への受診や支援利用への抵抗感・罪悪感

家庭内での課題（経済、養育、関係性）が複合している

子ども支援だけでは改善しにくく、保護者も支援対象にしていく必要がある

④ 続きにくい

学校が最前線になりやすい。学校に期待が集中する一方で、地域側の受け皿・連携機能が不足
継続支援（伴走）が切れやすい：相談しても単発的、紹介後に受診・利用につながらない、
年齢・所属変更（小⇒中、中⇒高、卒業）で支援が途切れる

課題を解決するための コミュニティの重要性について

ディーエンカレッジ所沢キャンパス

管理者兼生活支援員 戸口祐輔

(現ディーキャリアITエキスパート 立川オフィス 就労支援員)



d-encourage

sann

自立訓練を通して見えた共通の課題

高校:卒業・退学・不登校

大学:卒業・退学・休学

就職への失敗

会社:離職・休職

家族との関係性の問題

心身の体調不良

様々な理由はあるがいずれも「コミュニティから離れた」状態に陥っている

あまり間をあけずにいずれかのコミュニティに戻れば良いが
発達障害や精神疾患がある場合、心身の状態や失敗した体験の印象が強く
再度いずれかのコミュニティに属することが難しくなるケースが多い

働くという事は収入を得るという側面は大きい、「会社というコミュニティに属している」部分がある。
会社内で特別なコミュニケーションを行っていなくても、「社会的に孤立していない」ことは
心身の安定を図る上で非常に大切な要素

ディーエンカレッジは出来る限り早期に孤立した状態から脱してもらうための
一次対応として居場所的な役割を担う場という認識



d-encourage

課題に対して考えていること

大きく分けると、「精神疾患が要因」となるケースと「発達障害が要因」となるケース
「知的障害／境界知能」と診断または想定されるケースが複合的に絡み合っていることが多い



発達障害と知的な遅れを伴うか伴わないかはあまり関係なく
発達障害の二次障害として精神疾患の診断を受けている部分への対応をする必要がある

ここへアプローチをする視点が欠けてしまうとうまくいくものもうまくいかないため・・・

ディーエンカレッジは本人にとって本当に支援が必要なポイントがどこなのか
日常的にリラックスして過ごせる場で相談する力を身に付けてもらうことが最大の役割と考えている

医療・福祉・教育の分野の密な連携が出来る体制が作れたら、後手に回らない支援が出来る可能性を非常に感じる  encourage

各課題を解決するための活動

訓練内容を一覧にすると、6つの大分類・46種類の訓練を実施 + 運動・遊びなどの余暇活動

1. 生活環境の安定

- 1 身体と心の休まる環境
- 2 家族や親しい人
- 3 ルールを守る
- 4 薬と医療
- 5 危険の対処
- 6 貴重品の自己管理
- 7 相談や発信

2. 心身の安定

- 8 休憩と余暇の取り方
- 9 健康な状態
- 10 体調の安定
- 11 通える体力
- 12 感情表現、調整
- 13 ストレスのケア
- 14 睡眠時間

3. 生活のスキル

- 15 身の回りの整理整頓
- 16 身の回りの掃除
- 17 洗濯と衣類の交換
- 18 洗面、衛生
- 19 身だしなみ
- 20 入浴や整容
- 21 買い物、外出
- 22 調理、栄養
- 23 食事のバランス、回数
- 24 金銭管理
- 25 時間の意識、遵守

4. 社会のスキル

- 26 出席状況、生活のサイクル
- 27 予定の管理
- 28 他者との会話
- 29 あいさつの確認
- 30 周囲との協調性
- 31 共同作業の取り組み方
- 32 周囲への報告、連絡
- 33 複数の人との会話
- 34 持続性・集中力
- 35 意見を言う

5. 資源の知識・活用

- 36 交通機関の利用
- 37 社会資源の知識
- 38 電話をかける、うける
- 39 周囲の力を借りる
- 40 文字の活用スキル
- 41 数量、計算のスキル
- 42 PC活用スキル

6. 将来の生活

- 43 進路のイメージ
- 44 将来の生活イメージ
- 45 働くことへのイメージ
- 46 自分にあった将来の目標

全て出来るようになることが目的ではなく、あらゆる訓練内容を通して「考える機会」「話をする機会」づくりが目的

各利用者の環境要因が原因で対処できていないと思われる事を可能な限り取り除くための訓練だが
コミュニケーションをとり、コミュニティづくりに繋げる事がなによりも大事なポイント



最後に

関係機関から「自立訓練が居場所的な使い方になっているが、どういう方向性なのか？」と聞かれたことがあります。前述の通り「居場所である」ことからスタートだと考えています

社会的に孤立していた方を居場所として受け止めることがまず第一歩
自分が所属しているコミュニティと認識しているからこそ相談できることや自然と相談して貰える関係になります

外出することができていなかった方や外にでる自信がない方、学校に行けていなかった方が週1日から週3日以上通所出来るようになって、職員が「○日以上通所しないとだめだ」と伝えたことは(ほぼ)ありません
自分が所属しているコミュニティだから、自発的に通いたい、という気持ちになったのではないかと考えています

学校にいきたくない人にとって、学校はきっと自分が所属したいコミュニティと思えないのではないかと

会社に行きたくない、と考える方も同じく、その会社が所属したいコミュニティと思えないのではないかと

自室に引きこもってしまう方にとって、家族が関わりたいと思えるコミュニティと思えないのではないかと

ぜひ、学生たちを見る時にも、その学生自身が所属したいコミュニティになっているのか？
相性がよいコミュニティなのか？という視点を取り入れてもらえればと思います



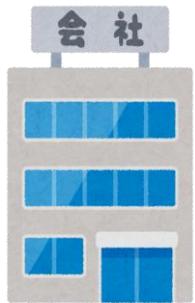
はじめまして

わたしたち、株式会社N・フィールドは**精神科に特化した訪問看護**です。
お住まいのご自宅に訪問して対面でお話しを伺います。
医療保険でご利用になれます。

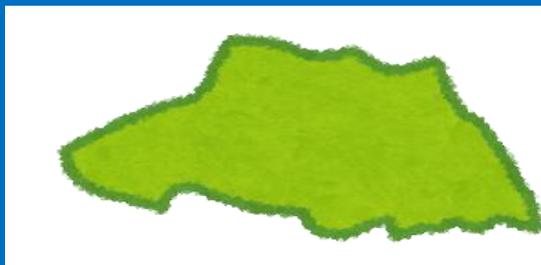
N・フィールド創設2003年

埼玉県内 現在15拠点

事業所名は



本社は大阪、
47都道府県
に230拠点
以上展開し
てます。



埼玉エリア 初上陸
2012年



訪問看護ス
テーション
デューン
所沢です

医療：訪問看護

福祉：精神保健福祉士

住まい：住宅支援



看護師と作業療法士が
医療と作業の視点からサポート



精神保健福祉士が
福祉の視点でサポート



住まい探しと入居後の生活
をサポート

利用者様の地域での生活を、各専門職が得意分野でサポートします。



?? 精神科訪問看護って
どんなことをしているの??



訪問看護ステーション デューン所沢

〒359-0044 埼玉県所沢市松葉町10-1

野口ビルディング 201号室

TEL : 04-2937-3133 FAX : 04-2937-3134

症状や健康状態のサポート



お薬に
関すること



体調面で
気になること



疾患やお悩みに
関すること



人付き合いに
関すること



トラブルに対して
どうしたらいいか

日常生活のサポート



お買い物や
日常の家事など



お手続きで
わからないこと



お仕事に関する
お悩みごと



採用面接の
相談・練習

ストレス発散・気分転換



体操や散歩



レクリエーション

利用者様らしく過ごせるようなケアやサポートを、可能な限り対応しております！



?? 精神科訪問看護って どうやって利用するの??

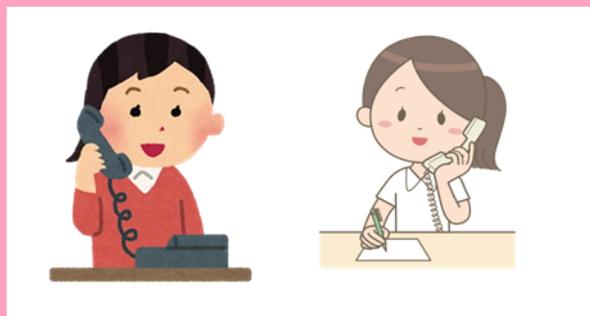


訪問看護ステーション デューン所沢

〒359-0044 埼玉県所沢市松葉町10-1
野口ビルディング 201号室

TEL : 04-2937-3133 FAX : 04-2937-3144

①相談 受付



まずは、お気軽にご相談ください。

②初回の面談



自宅や学校、通所先でお悩み
や困りごとをお伺いします。

③主治医による指示書の作成



病院に受診してい
ただき、主治医に
「精神科訪問看護
指示書」の作成を
依頼します。

④自立支援医療制度の手続き



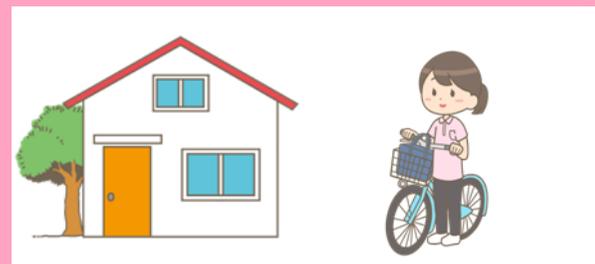
申請手続きについても、わかりやす
く説明して、お手伝いいたします。

⑤利用契約



利用契約を交わし、回
数や曜日を決めます。

⑥訪問看護の利用開始



訪問看護による在宅支援が
開始となります。

私たちは、訪問看護を通じて、利用者様の心に寄り添い、サポートいたします。

とこトーク・ダイアログ

こども・学生における地域連携の重要性について

～ 児童館を通じて見えてきたもの～

所沢市立こばと児童館 館長 桜井 徹
(指定管理者：(公財)埼玉 YMCA)

1. 地域連携における児童館の役割

児童館は、学校（教育）、家庭（生活）、地域（社会）を繋ぐ「結節点」として機能します。

- ・ハブ機能：学校、こども家庭センター、主任児童委員、児童相談所などと連携し、支援が必要な子どもや家庭を早期に発見し支援へとつなげます。
- ・子育て支援の拠点：乳幼児親子を対象としたプログラムを通じ、親の孤立（孤育て）を防ぐ地域コミュニティを形成します。
- ・居場所の提供：思春期の中高生が抱える悩みを受け止める「サードプレイス」として機能します。

2. 児童館活動の多様性

地域の実情に合わせ、活動内容は年々、多様化・多角化しています。

- ・ 遊びの創造：伝統遊びから、プログラミング、eスポーツ、工作、スポーツまで。
- ・ 多世代交流：高齢者との伝承遊びや、中高生が乳幼児と触れ合う体験プログラム。
- ・ 生活支援：経済的困難や孤独対策としての「子ども食堂」や学習支援の併設。
- ・ アウトリーチ：館内に留まらず、公園や学校へ出向く移動児童館活動。

3. 将来的展望と課題

これからの児童館は、「誰一人取り残さない（Inclusive）」社会の実現に向け、さらなる進化が求められています。

インクルーシブな環境整備：多様な背景を持つ子どもたちが等しく安心して過ごせる居場所づくり。

デジタルとリアルとの融合：オンライン相談や情報発信、メタバース空間でのコミュニティ形成。

自治体戦略の核としての活用：こどもまんなか社会の象徴としての位置づけ。

【まとめ】

児童館は、こどもの「やりたい」を応援し、地域の「つながり」を推進・再生する場所である。

こども達の「今」

保育現場で感じること

中新井保育園 山下淳史

はじめまして まずは自己紹介

保育士生活30年

大泉洋と同年代

公立園、施設合わせて7園経験

こども達と遊ぶのが大好き

(右のイラストは一例です)



保育園でのこども達の変化

- 空気を読む
- コロナを経験して得たもの・失ったもの
- 経験の差
- 遊ぶ場所の減少
- 何もないところの大切さ

子育て支援策の多様化

- 未来館・保育園の遊ぼう会・育児教室の充実
- スーパーなどのこどもスペースの設置
- 多様な保育施設の存在
- 口コミやSNSを通しての情報共有

保育園で感じること・思うこと

- 情報の格差
- 卒園後のつながり
- 個人情報保護との兼ね合い
- 公立保育園の特徴
- 細く長い支援を作りだす “つながり” 力

【所沢市】 ところトーク・ダイアログ

令和8年3月1日
所沢市保健センター

コミュニティ・スクールにおける "大人の学び"を生かした サポート制度の構築

学びの輪、地域の和。未来へ繋ぐ



社会教育士

市川 重彦

Mail: shigehiko.ichikawa@gmail.com

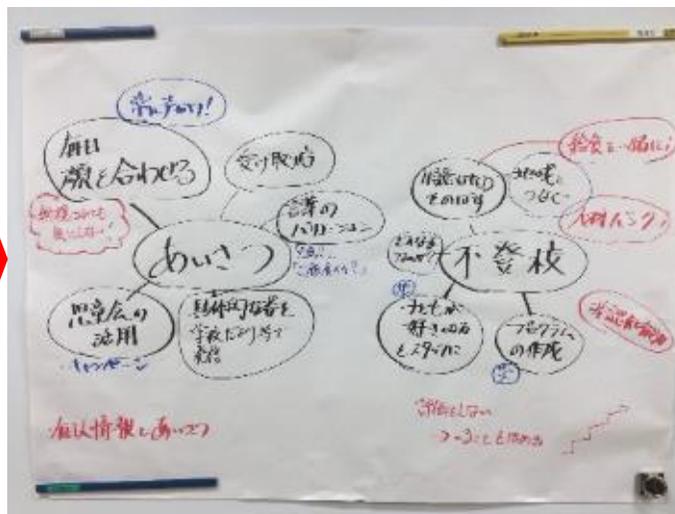


重点課題 ①コロナ禍であいさつが減った ②不登校の増加

2 課題解決に向けた**具体策** (グループで20分 ⇒ 全体で15分)



⑤グループ協議(**発散**)
ファシリテーター
伴走支援の指導主事・学校



⑥各グループでの
協議内容の視覚化



⑦協議内容の発表し、
方向性の確認 (**収束**)

方向性 ①地域全体で挨拶 ②不登校支援に住民が関わる

実行性: 何を、いつ、どのように

解決策 ①地域で共通する
標語の作成・啓発

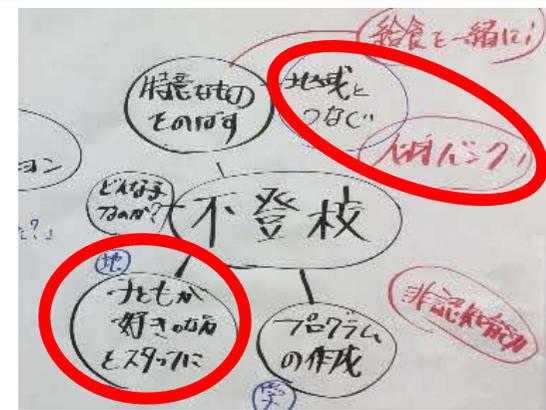
②地域住民による
不登校支援の体制づくり

R5.6月 第1回 学校運営協議会

議題：学校の諸課題(熟議)

不登校支援 ⇒ 地域がサポーター？

地域でも不登校を支援したいが、
どんな声を掛ければ良いか不安…
 声の掛け方を**学ぶ場がほしい!**



R5.8月 スキルアップ講座

地域に開かれた校内研修

不登校支援の実際

～さまざまな児童に対する言葉かけ～

【講師】所沢市立教育センター指導主事

57人参加：CS委員、民生委員・児童委員、
 社協CSW、児童館職員、保護者、教職員



言葉掛けロールプレイ



R5.10月 第2回 学校運営協議会

サポーター制度の発足に向けて(熟議)

【地域】委員：地域住民・団体等への周知

【学校】サポーター説明会の実施

⇒ **地域(委員)と学校の役割を明確化**

R5.12月～ “ふらっと(FLAT)サポーター”活動開始

登録・受付 ⇒ 校内パトロール、児童への声掛け・あいさつ、**不登校支援**



安全面から登録・受付



オープンスペースの校内を巡回



持久走を応援→体力向上



学校農園で児童のサポート



不登校支援の学びを**継続**

講師：NPO子ども地域ネットワーク所沢
ケース例の対応策をグループで協議



拡大熟議

講師：学校運営協議会「チームまなび」
目指す子ども像のアクションプラン策定



所沢と松井地区の歴史と文化

講師：所沢市教育委員会 文化財保護課
中学生から80代までが一緒に学ぶ機会に



手打ちうどん試食会

調理：後援会
総合的な学習の時間での体験活動の確認

学校運営協議会と教員による年間指導計画の協働作成

→ R 7 生活科と総合的な学習の時間を「まつい学」と称して計画



- ①12/2 顔合わせ、スケジュールの確認
- ②1/9 **地域の教育資源の洗い出し**
- ③2/3 年間指導計画（原案）協議①
- ④2/10 年間指導計画（原案）協議②
- 2/21 第3回学校運営協議会で提案・協議
- ⑤3/6 CS会議での意見を元に修正 ⇒ 完成

学校運営協議会

Teamまなびメンバー

- ・民生委員・児童委員
- ・自治会
- ・公民館長
- ・パトロールボランティア隊

それって

社会教育だよね!?

学びの輪、地域の和。未来へ繋ぐ



社会教育士



#つながり #経験(EX) #高校生

とこトークダイアローグ

所沢高等学校 神谷一彦

Kazuhiko Kamiya

神谷 一彦

地理歴史科、渉外部主任
インターアクトクラブ顧問

ホワイトボードミーティング認定講師
2030SDGs公認ファシリテーター
QU研修会講師、所沢市観光コンシェルジュ

〒359-1141

埼玉県所沢市小手指町3-14 L507

TEL 090-1467-4067



koara2222



Kamiya
Kazuhiko

所沢高校のスローガン

「自主自立」

自ら考え、自ら行動する

「十人十色」

一人ひとりの違いを認め合う

DXの時代だからこそEXを



ICT活用、AI活用、オンライン化
——もちろん大切です。

しかし、DXの時代こそ、
EX(Experience)が必要です。

本気でぶつかる

誰かと真剣に向き合う経験

リアルに伝える

大人に自分の意見を届ける経験

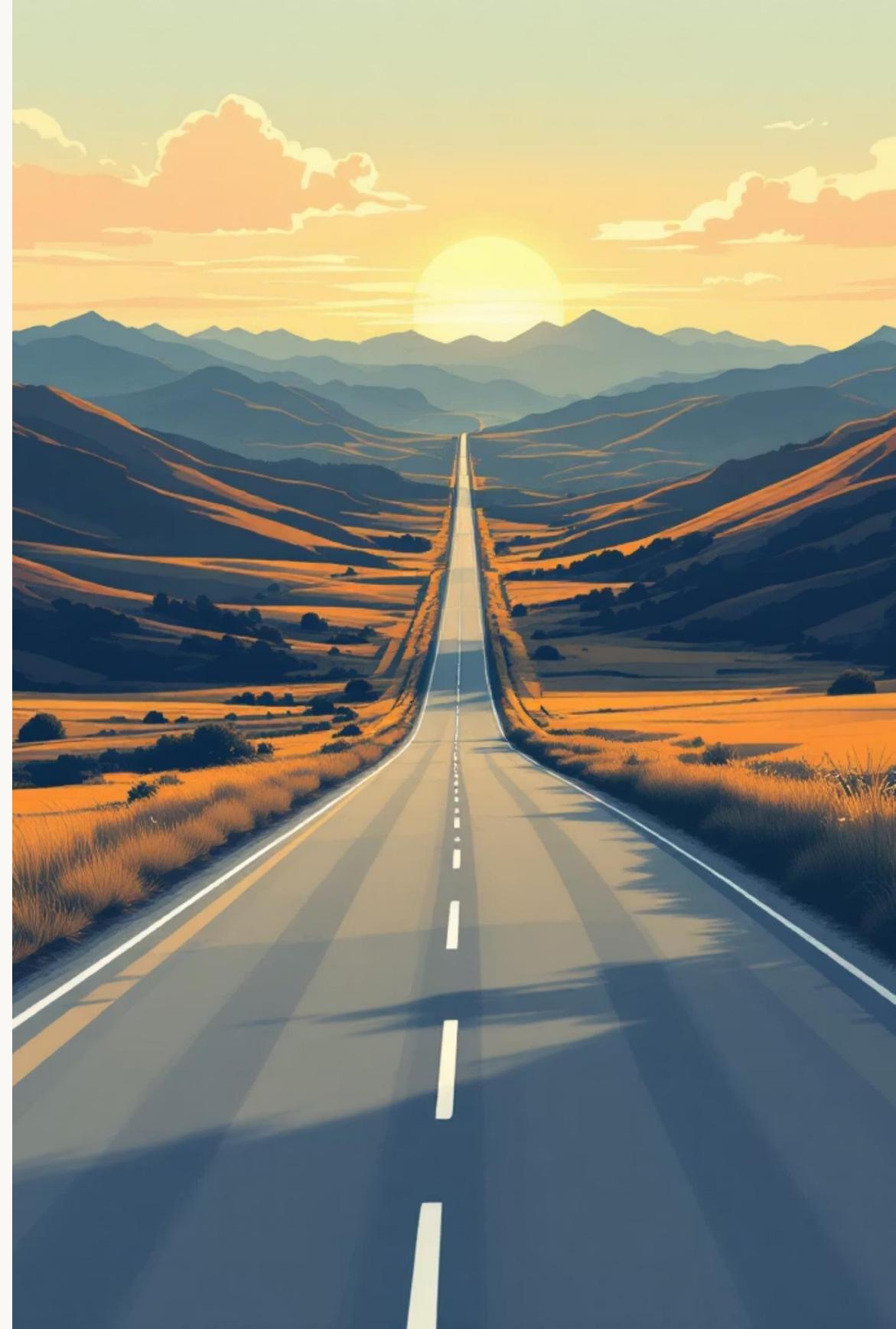
失敗を味わう

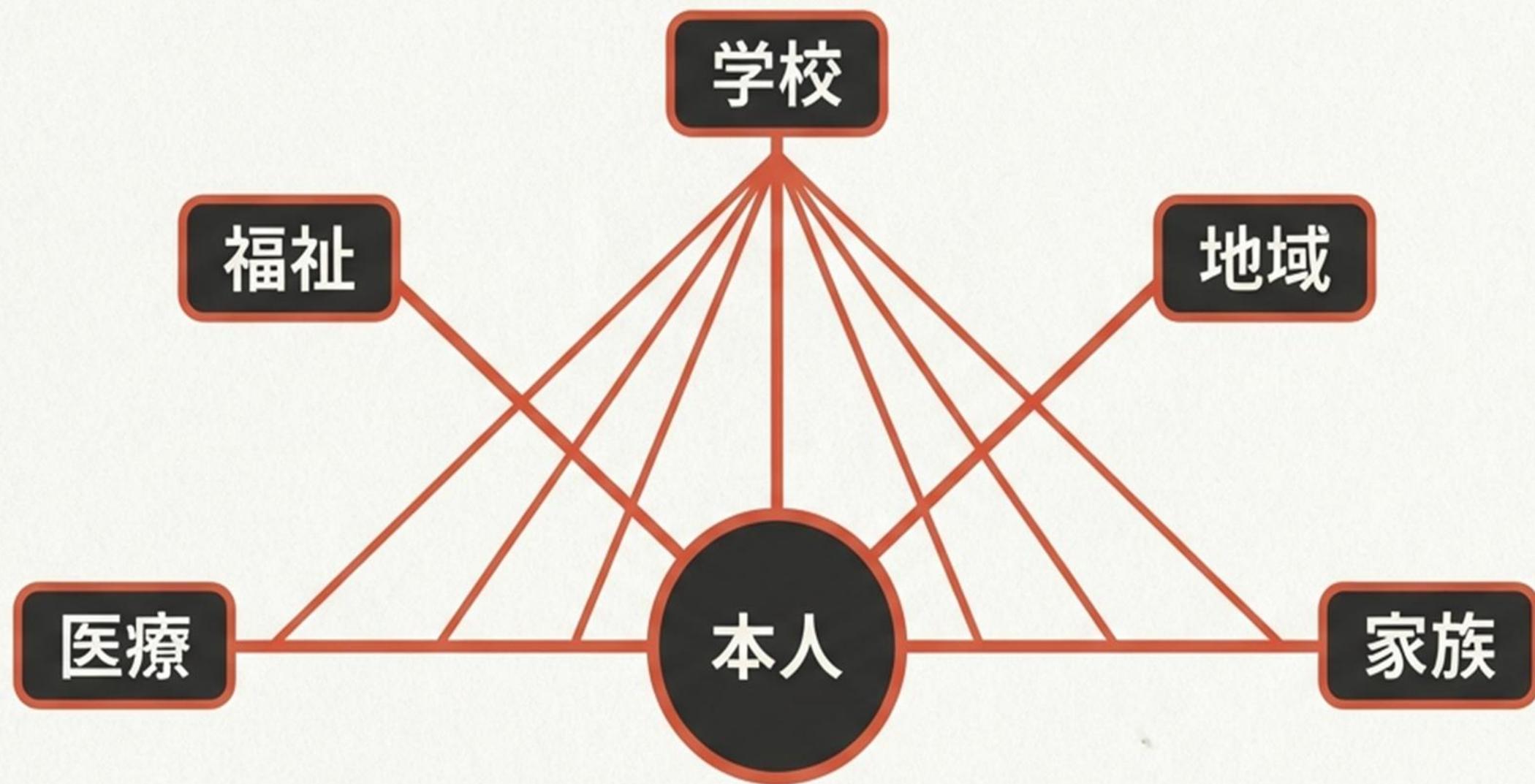
悔しさを噛みしめる経験

デジタルでは代替できない経験があります。

「自主」とは、自分が自分の人生のハンドルを握ること

情報が多すぎる時代。
他人の正解が無数に流れてくる。
だからこそ必要なのは、
”自分で決めた経験”です。
経験こそが、主体性を育てます。





依存先が多いほど、人は倒れない。

困ったときに頼れる場所が一つしかない、それが失われたときに共倒れします。
頼れる先が10個ある状態こそが、真に安定した「自立」なのです。

十人十色を本気で保障するには

所沢高校は「十人十色」。でも、現実はどうでしょうか。

1

大学進学が正解に見える

2

失敗は避けるべきものに見える

3

挑戦はリスクに見える

本当に十人十色を保障するなら、成功体験だけでなく、**挑戦と失敗の経験**を地域全体で支える必要があります。学校の中だけでは限界があるのです。

自主自立

授業 行事 部活

マイプロ その他

= 主体性・自己決定



十人十色

Who are you?

What color are you?

= 自分を知る

行動

新しい人に会う読む)

新しい場所に行く

新しい体験をする

= 越境体験

わたしは
ダレの言いなりにもならない
by 宮崎吾郎 (所高OB)

EXが高校生を変える瞬間

インターアクトクラブ、総合的な探究の時間で、地域と連携した活動を行っています。



企業と商品を開発する



地域課題を解決する



イベントを運営する

体験することで生徒は”受け身”から”当事者”に変わります。
これはDXでは起きません。EXでしか起きない変化です。

2030年の所沢に向けて



2030年、所沢の高校生がこう言える地域にしたい。

「困ったら相談できる」

「やってみたいと言え
ばつながれる」

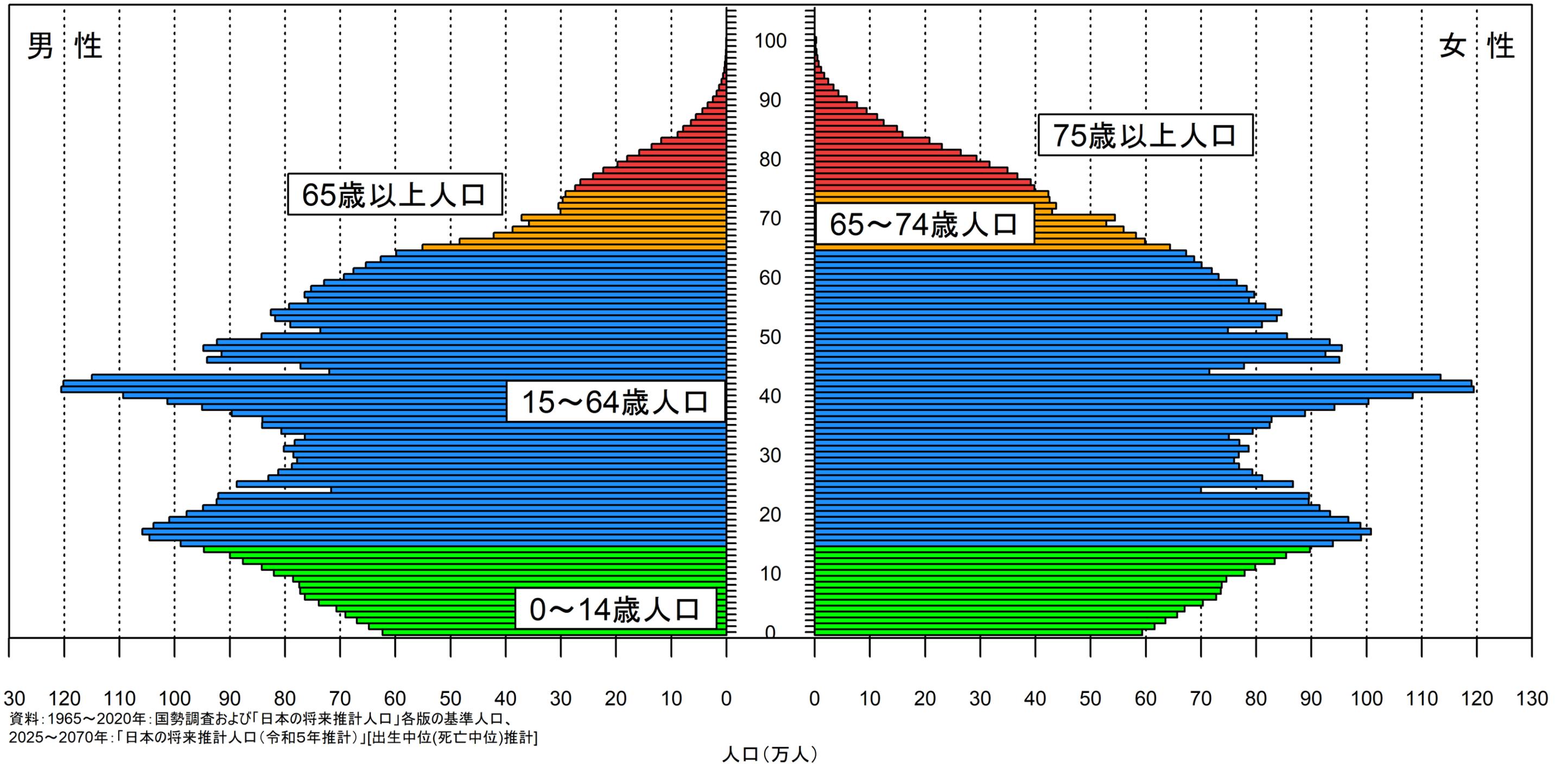
「失敗しても戻れる」

それはDXが進んだ地域ではなく、EXが豊かな地域です。

そして今、私たちに必要なのは、DXだけではなく、EXをどう設計するか。子どもたちの未来を、一緒につくりましょう。

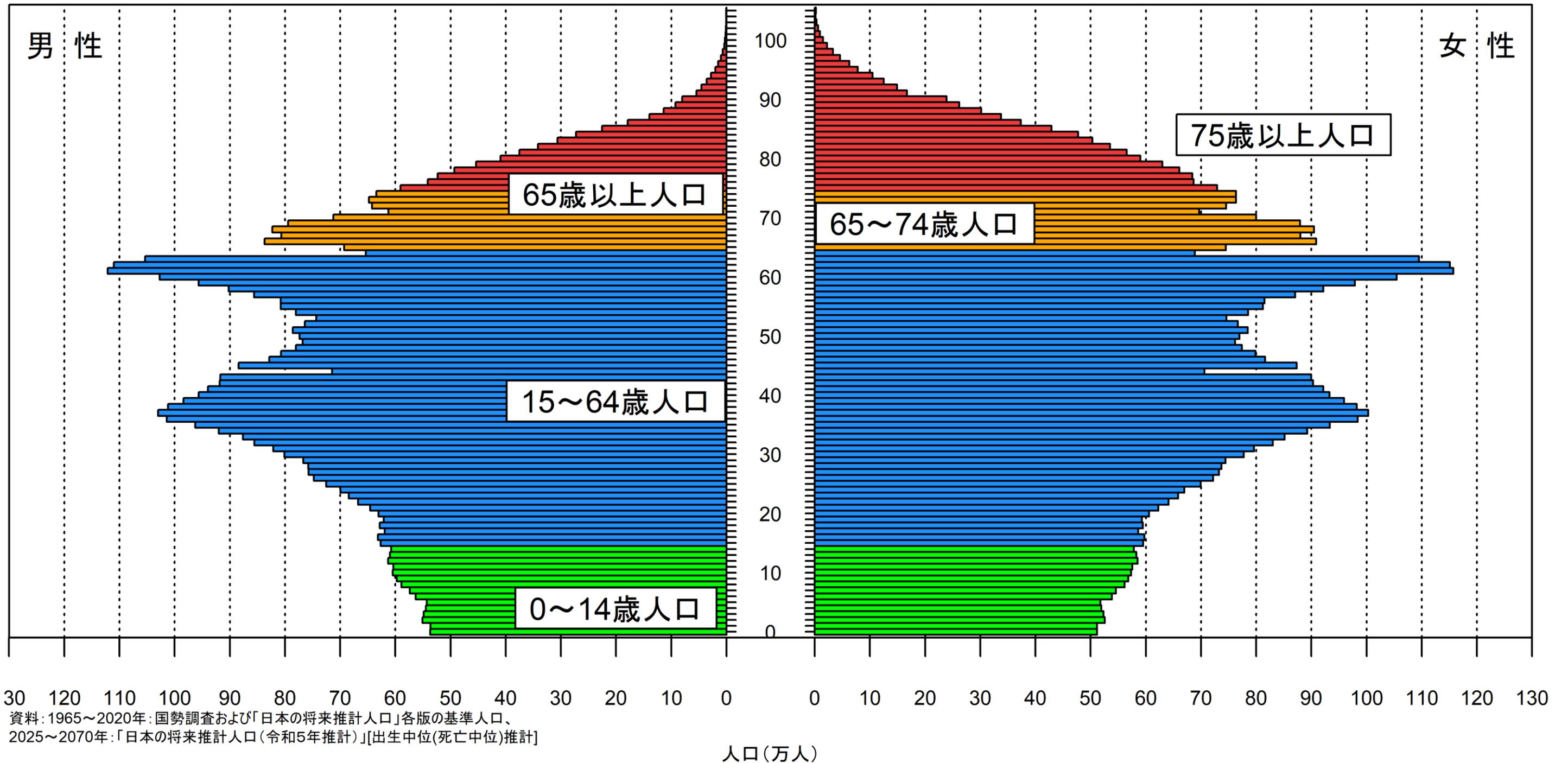
35年前

1990年



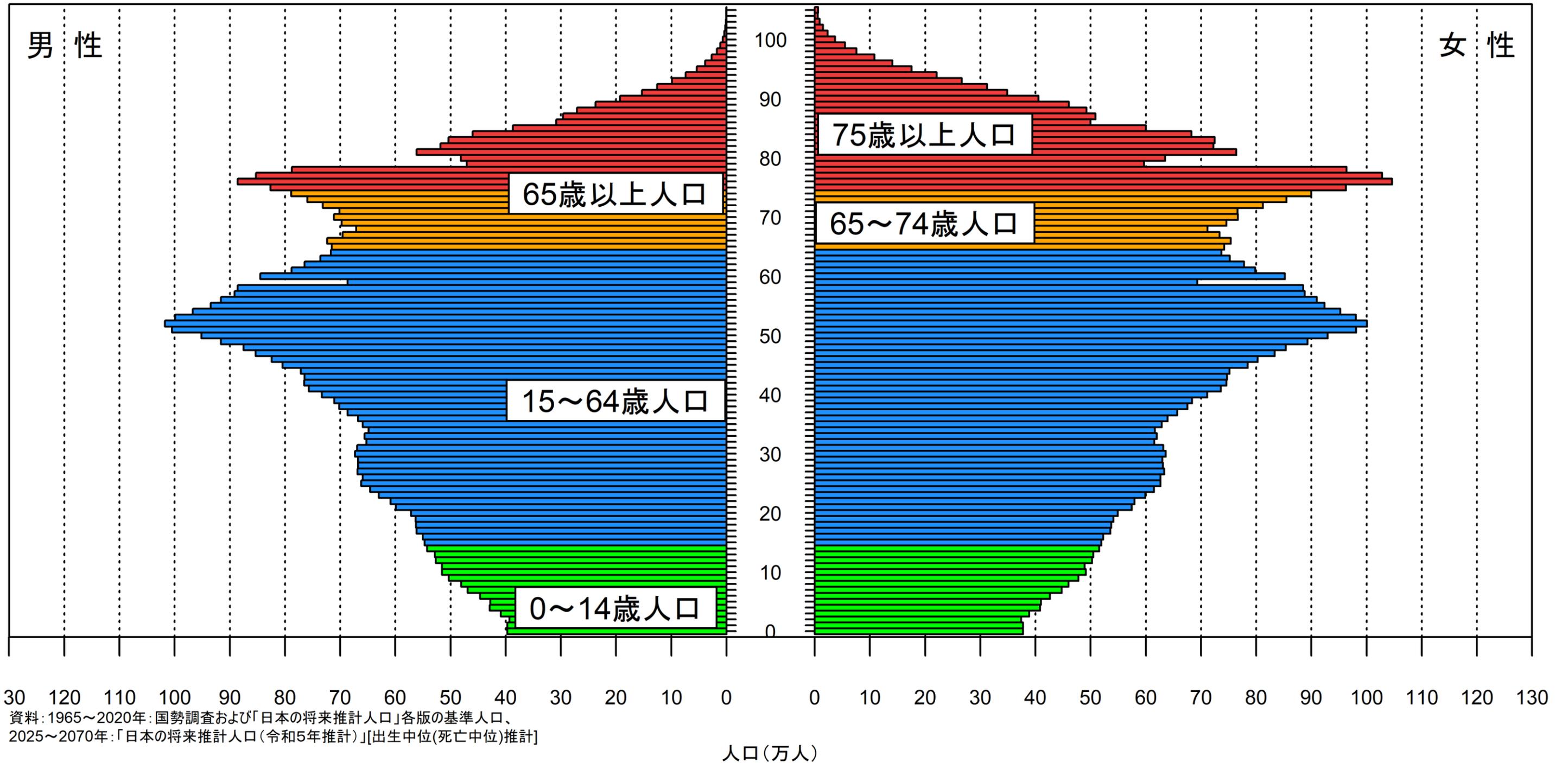
15年前

2010年



現在

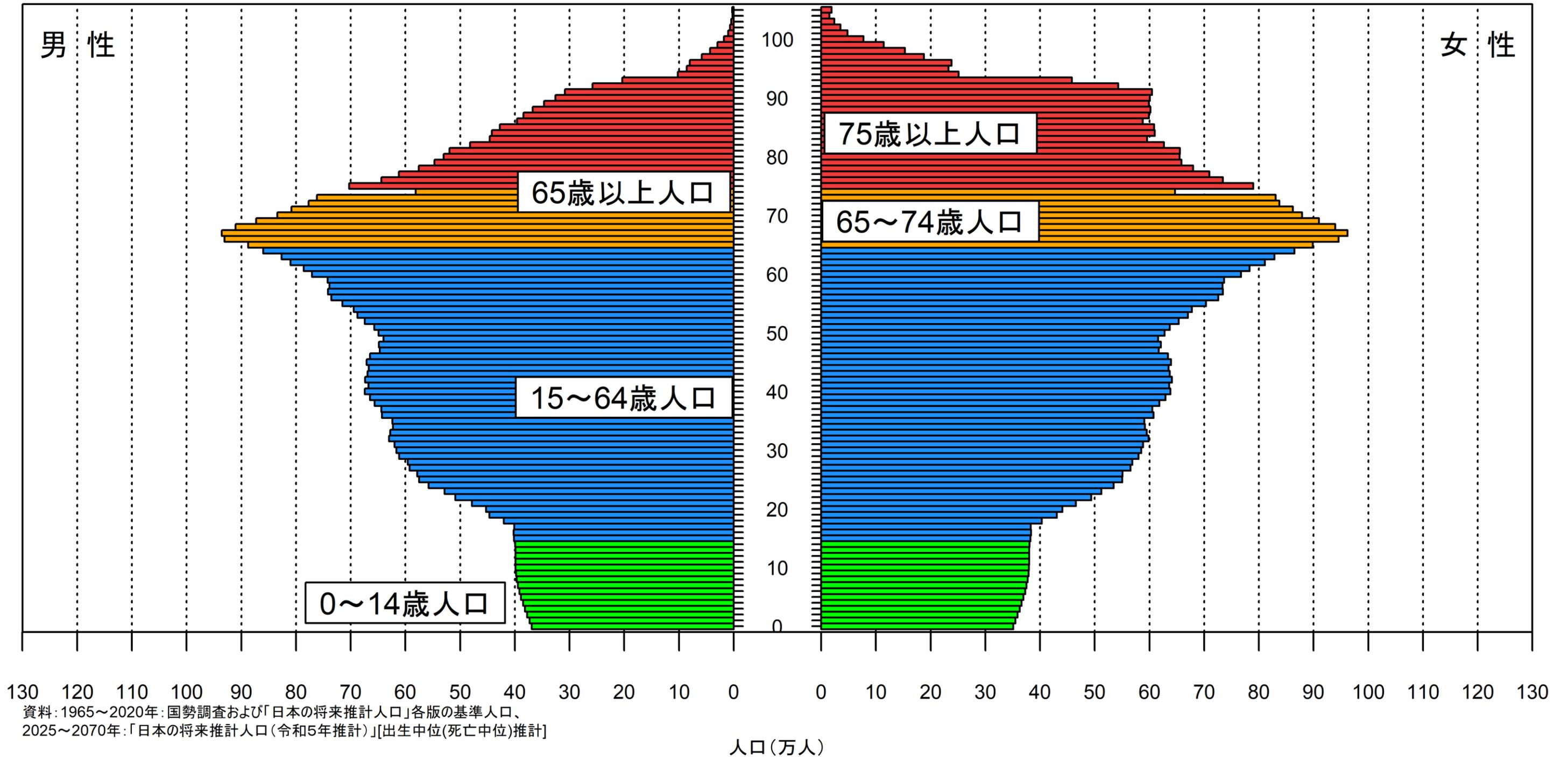
2025年



資料: 1965～2020年: 国勢調査および「日本の将来推計人口」各版の基準人口、
2025～2070年: 「日本の将来推計人口(令和5年推計)」[出生中位(死亡中位)推計]

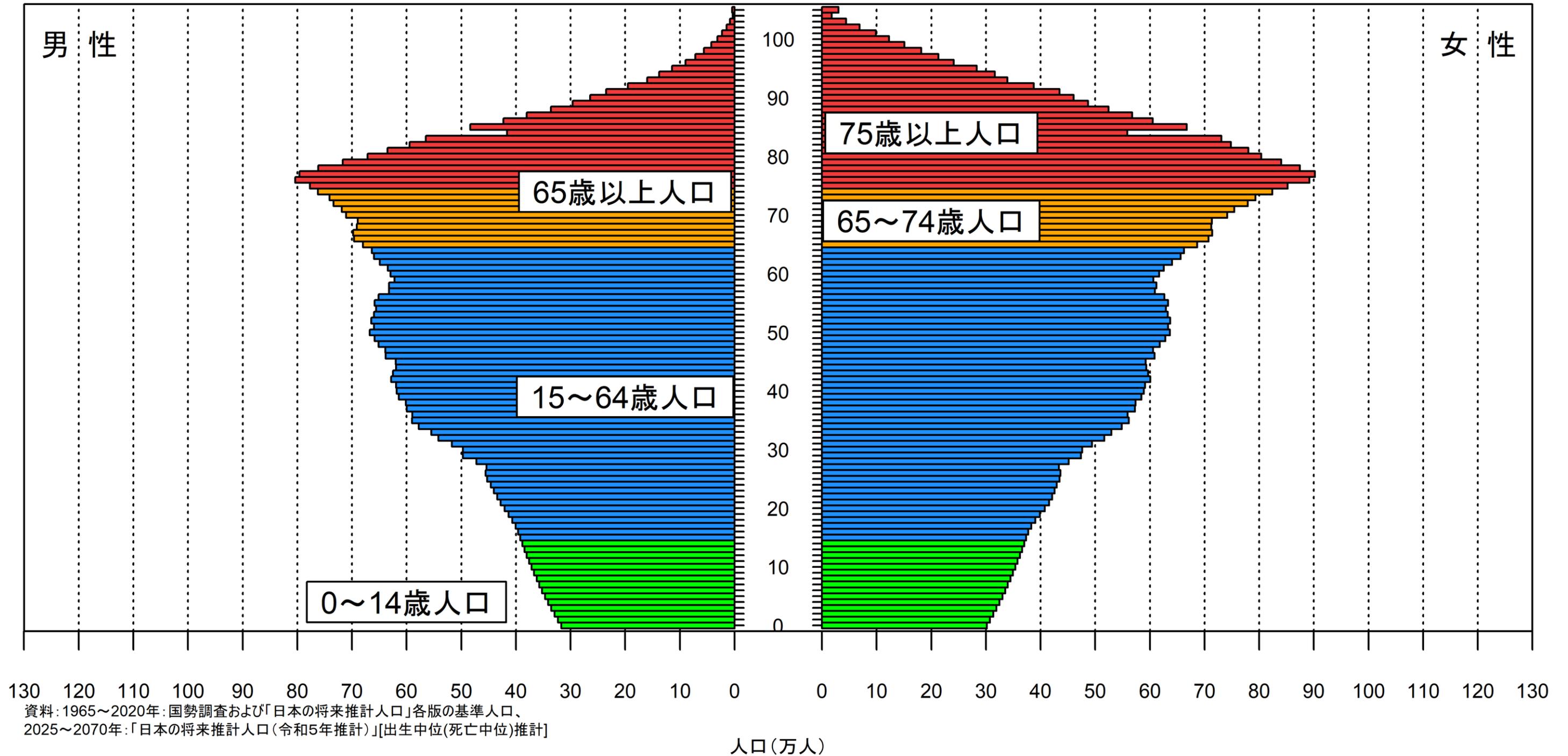
15年後

2040年



25年後

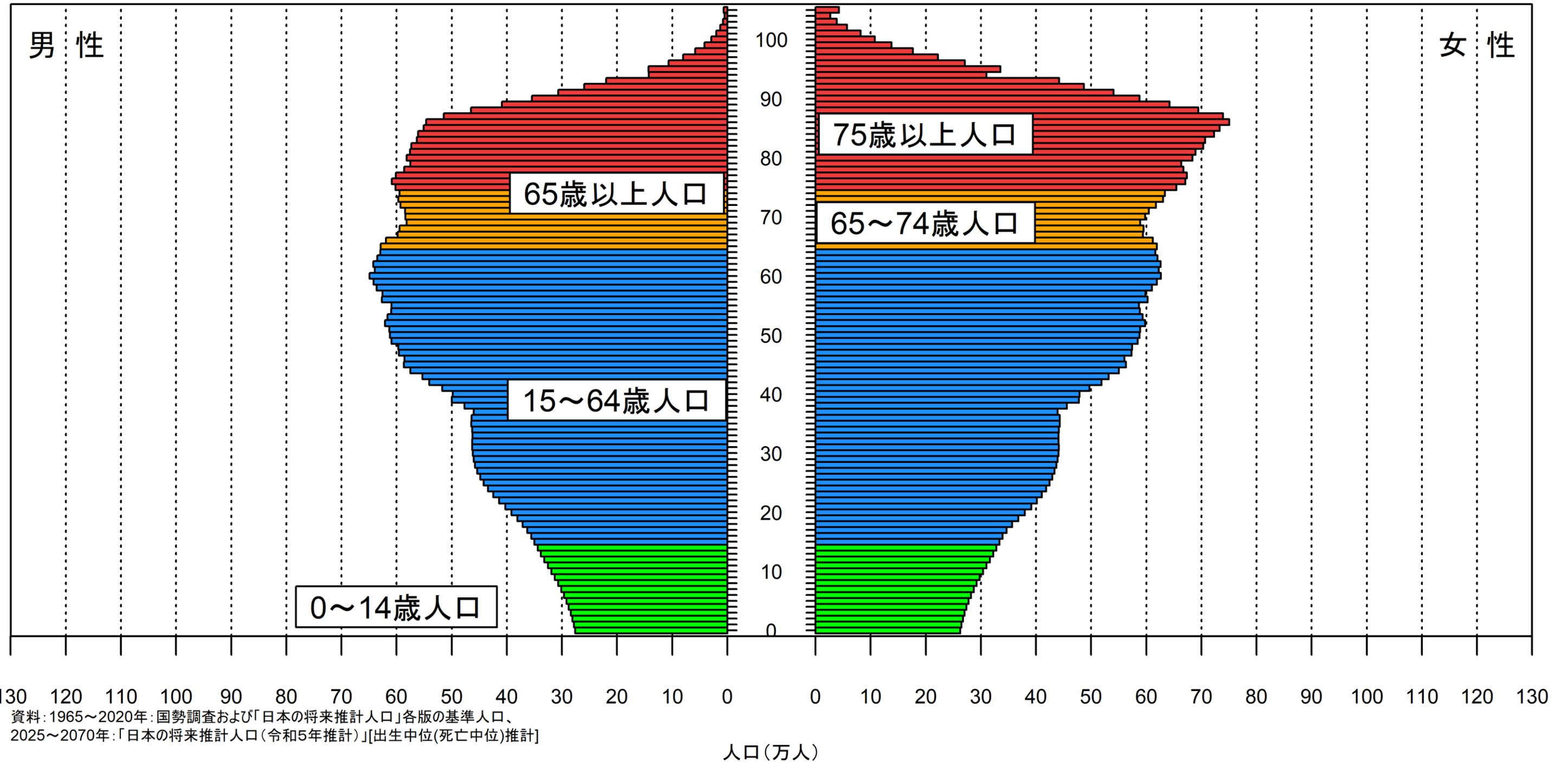
2050年



資料: 1965~2020年: 国勢調査および「日本の将来推計人口」各版の基準人口、
2025~2070年: 「日本の将来推計人口(令和5年推計)」[出生中位(死亡中位)推計]

人口(万人)

2060年



130 120 110 100 90 80 70 60 50 40 30 20 10 0 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90 100 110 120 130

資料: 1965~2020年: 国勢調査および「日本の将来推計人口」各版の基準人口、
2025~2070年: 「日本の将来推計人口(令和5年推計)」[出生中位(死亡中位)推計]

人口(万人)

夢・挑戦・達成

— 自信を育てる通信制教育の実践 —



2026年3月1日
クラーク記念国際高等学校
所沢キャンパス長
坂田 智明

「今、子どもたちを取り巻く環境の変化」

- ・ 2024年度 小中学生の不登校 約35万人
- ・ 本校入学生の約70%が中学時代に不登校を経験

背景：人間関係の複雑化

SNS社会

正解のない時代への不安

「生徒たちが抱えているもの」

- ・ 自己肯定感の低下
- ・ 「どうせ自分なんて」という思考
- ・ 失敗への強い不安
- ・ 他者との関わりへの恐れ

「私たちが目指す教育」

- ・ クラークの教育理念

「夢・挑戦・達成」

- ・ 所沢キャンパス教育指針

「10年後の社会において、主体的に行動し
多様な場で活躍できる人材の育成」

「自信を育てる教育実践」

① 資格・検定取得

英語が苦手でも英検5級から
「できた」を形にする

② 週1回のコミュニケーション授業

対話力・表現力・傾聴力

③ 地域ボランティア活動

社会との接点

「必要とされる経験」

「現場からのメッセージ」

保護者の皆さまへ

「遅れ」は取り戻せる

大切なのはペースではなく方向性

不登校経験 = 弱さではない

繊細さ・共感力・多様性理解は強みになる

最後に

子どもたちは可能性の塊

自信を取り戻せば、必ず前に進める



所沢Secret Base

学生と地域のつながり

杉山月咲
大河原彩翔

目次

01 所沢SecretBaseとは

活動内容

私たちのこれまで

利用者について

施設について

02 学生の声

学生の抱える課題と悩み

今感じる必要性

運営の課題と今後

最後に

01

所沢Secret Base とは

● 活動内容

学生が主体の 地域の居場所

放課後

学生の居場所

- 高校生・大学生スタッフで鍵の管理
- 勉強・おしゃべり・ゲームなど、
過ごし方やいつ来るかは自由

午前

不登校支援

- 大学生・地域のボランティアの方々が
スタッフとして在中
- 人との繋がりを大切に、学校へ戻る
きっかけづくりも支援

休日

地域活動

- 市内のイベントに出店（縁日など）
- 外部向け・内部関係者向けイベントの
企画・運営

年間開放日
約350日

活動・
イベント
約45回

● 私たちのこれまで

2023年
6月

所沢SecretBaseを開設。

午前中は不登校支援、午後は学生の居場所として開放。

- ・夏休み勉強会（小中学生向け）／夏期講習（高校生向け）
- ・あかねの風保育園夏祭り
- ・しんとこフェス
- ・小手指公民館分館文化祭
- ・子ども若者まるっと応援フェス
- ・こばと児童館クリスマス会
- ・イタリアデレッダ高校交流会
- ・ところティーンズフェスティバル

2025年
10月

新所沢に移転。

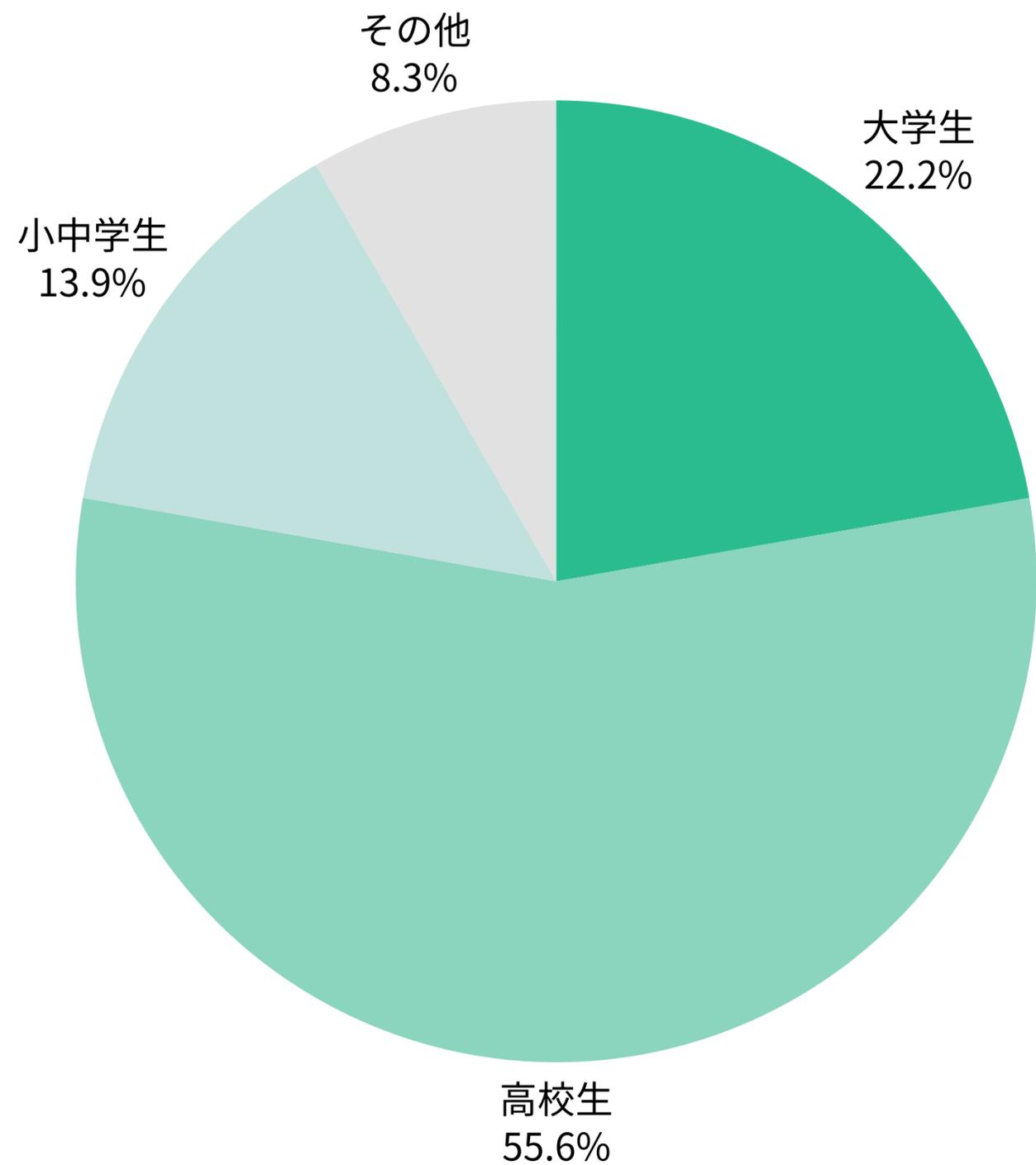
現在の所沢SecretBaseが誕生。

2026年
6月

所沢SecretBase 3周年。

皆さまに支えられながらこれからも新所沢地域を学生みんなで盛り上げていきます。

● 利用者について

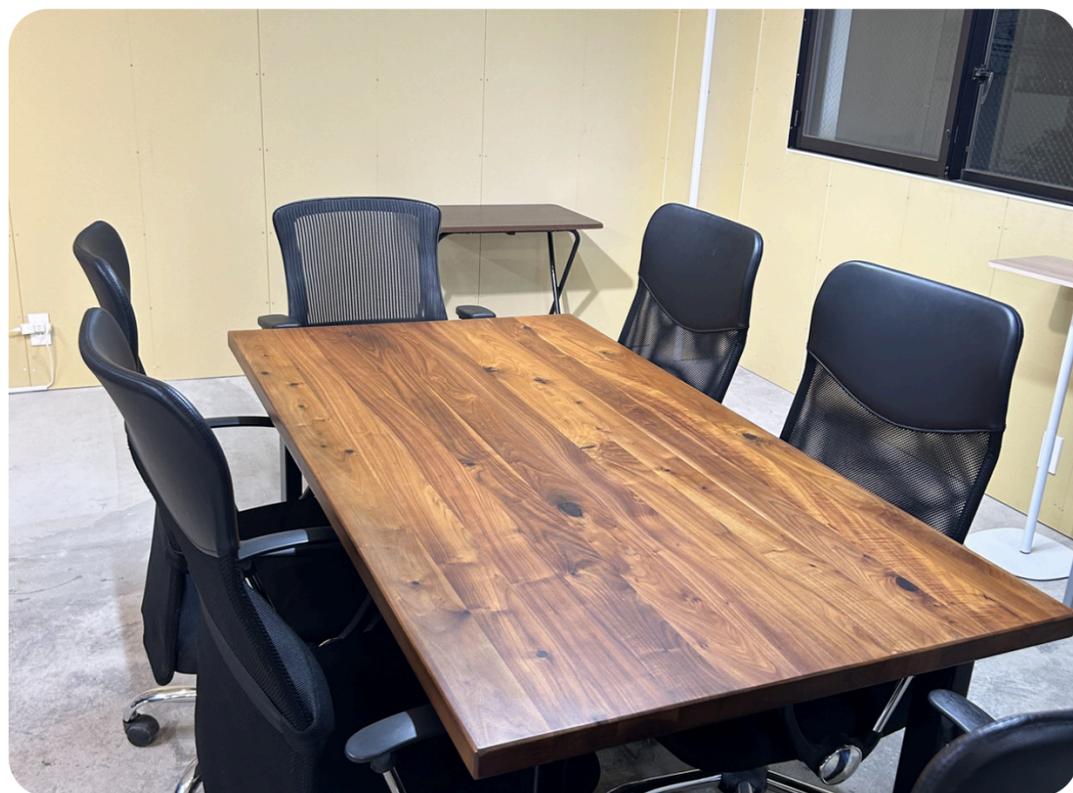


約 1120 人の利用者
(2025年度2月現在)



施設について

勉強・作業スペース



会議・雑談スペース

ボードゲーム
テレビゲーム



● 施設について

くつろぎスペース



ウォーターサーバー

電気ケトル





02

学生の声

● 学生の抱える課題と悩み

私たち学生を取り巻く環境は日々変化しています。

一見自由そうに見える学生は、本当に自由なのか、考えることがあります。

01

放課後の
選択肢の少なさ

02

金銭的価値観の壁

03

役割に縛られた
生活



あやかの思うこと

- ・ 安心して過ごせる
- ・ 一人じゃない
- ・ 自分になることができる

安心感 # 家族 # 落ち着く場 # 頼る
語る # 挑戦 # つながり # 生活の土台



つかさの思うこと

- ・ 帰ってこられる場所
- ・ ロールモデルの循環
- ・ 地域との懸け橋

共創 # 自己肯定感 # 主体性 # 成長
人の温かさ # 地域拠点 # 繋ぐ # 尊敬

学生運営だからこそ抱える課題と 継続に向けた今後の展望

課題

- 進級・進学に伴い、継続して運営に関わるメンバーが限られる。
- 居場所という定義の理解や所沢 SecretBase の理念の共有が難しい。

改善案

- OB・OGネットワークの形成。
- 新規入会時や定例会にて、それぞれの居場所への想いやエピソードを共有できる機会を設ける。
- 地域の方々との交流の促進。

今後の展望

学生主体だからこそ不安定。

同時に、サイクルの早さを強みに。

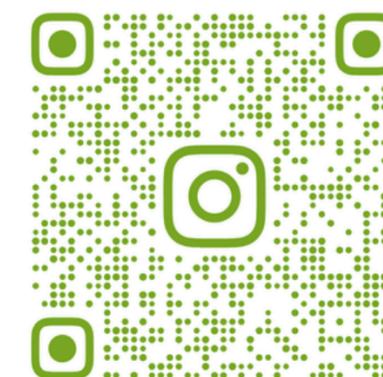
今いる人にとっても、いつか帰ってくる人のためにも、みんなの居場所であり続けるために、循環し続けるコミュニティの形成を目指します。



最後に

Instagramにて開放日やイベントなど活動について
ご覧いただけます。
ぜひフォローをお願いいたします。

Let's check !



@TOKOROSB

お問い合わせ



sb.at.tokorozawa@gmail.com

Thank You

最後までご覧いただき、ありがとうございました。
これからも地域とともに歩む所沢SecretBaseをよろしく申し上げます。

—15時 開始—

1回目 グループディスカッション

「現場で見えている変化と違和感」

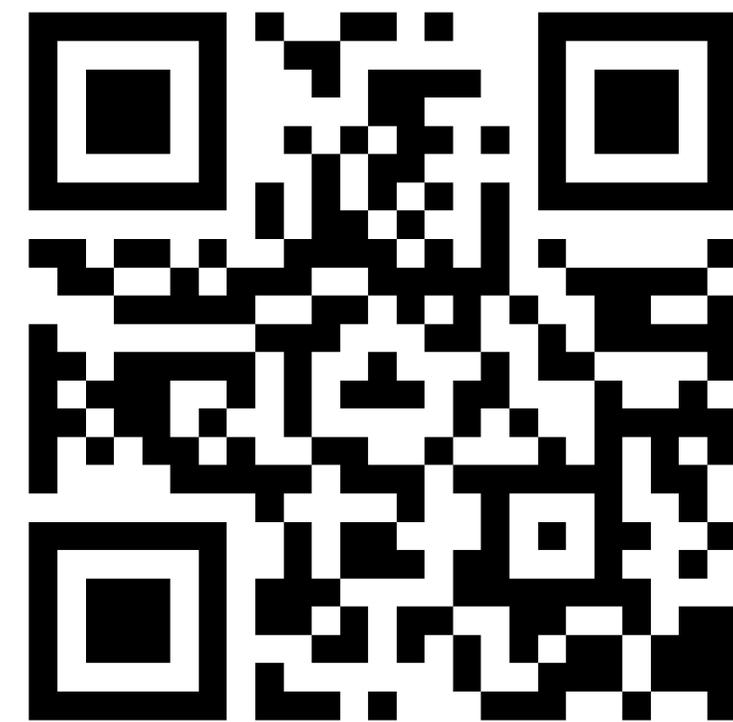
2回目 グループディスカッション

「2030年（4年後）所沢の子どもが

安心して過ごせる地域とは？」

名刺交換・交流（20分）

HPQR



自己紹介

1. お名前

2. ご所属

3. 参加理由と今日期待していること



現場で見えている”変化””違和感”

1. 5年前と比べて何が変わった？
2. 気になっている子どもたちの傾向は？
3. 制度の隙間はどこにある？

目的

現場で起きているリアルな変化を共有し、分野を超えて
課題の共通点を見つける



2030年、所沢の子どもが安心して過ごせる地域とは？

1. どんな環境があれば安心？
2. 今足りてないものは？
3. 大人ができることは？

目的

課題で終わらせず。未来像を描く



名刺交換・交流

繋がれば救えたかもしれないケース

1. 共有していれば変わったかもしれない事例
2. どんな連携が必要？
3. 連携を阻んでいるものは？

16：45終了
クロージング



本日はありがとうございました。

1. 資料全体に共通する「課題」と「キーワード」

「孤立」と「見えにくさ」

社会的な孤立: 不登校やひきこもり、精神疾患により「コミュニティから離れた」状態が共通の深刻な課題として挙げられています。

言語化の難しさ: 本人が「つらい」と言葉にできず、周囲からは「怠け」や「性格」に見えてしまい、問題が表面化するまで気づかれない「早期発見の難しさ」が指摘されています。

相談のハードル:

「助けを求めることが少ない」という子供の傾向や、18歳を境に相談窓口が激減する「年齢の壁」が共通の障壁となっています。

「分断」と「リソース不足」

支援のバラバラ感: 医療・教育・福祉の窓口が分散しており、どこに相談すべきか分からない「縦割り」の状態が課題です。

専門機関の不足: 心理療法や言語療法ができる医療機関が圧倒的に足りず、診察まで数ヶ月待ちという「リソースの限界」が共通の悩みです。

2. 必要とされている支援の在り方と目指す社会

「治療」から「伴走・傾聴」へ

傾聴による関係構築: 単なる症状の改善だけでなく、カウンセリングのように「話を聴く」ことで安心感を与え、信頼関係を築くことが全ての分野で重視されています。

「次の一歩」を支えるケア: 歯科におけるホワイトニングや教育での資格取得のように、外見や成功体験を通じて「自信」と「前向きに生きる気力」を取り戻す支援が求められています。

「居場所」としてのコミュニティ所属感の醸成:
支援のスタートは、本人が「ここは自分の所属したい場所だ」と思える「居場所」であることです。

多職種連携（エコシステム）:
1つの施設で解決しようとせず、地域のあらゆるリソースを繋いで「地域全体で守る仕組み」を構築する必要があります。

「弱さ」を「強み」と捉え直す社会

多様性の理解: 不登校や疾患の経験を「弱さ」ではなく、繊細さや共感力といった「強み」として捉える視点の転換が提言されています。

ありのままでいられる場所:
公園などの身近な公共空間を、誰もが排除されず「ありのまま」でいられる居場所としてデザインしていくことが理想とされています。

「切れ目のない」支援体制

予防と早期介入:
深刻化してから対応するのではなく、日常的な生活導線の中で「心配」なレベルから繋がれる、後手に回らない体制が必要です。

とこトーク・ダイアログ 当日の様子

当日は、行政・医療・看護・福祉・教育・民生委員・保護者・学生など、57名が参加しました。

所沢市として、これほど幅広い分野・年齢層の方々が一堂に会し、子どもたちについて対話を行う取り組みは初めての試みでした。

共通して話題に上がったのは、「支援のつなぎ」と「安心できる環境」の必要性です。分野ごとに支援は存在しているものの、どのようにつなぎ、どのように安心を保障していくのかという視点が重要であることが共有されました。

グループワークでは、学生自身の経験値の重要性や、支援者同士の横のつながり、知識の広がりを持つことの必要性について多くの意見が出されました。

専門的な知識がなくても、地域で楽しい活動があることや、学生に関心を持ち、挨拶を交わすことだけでも、学生にとっては大きな意味を持つという意見がありました。「地域に戻りたい」「つながりを求めて所沢へ戻りたい」と思える環境づくりこそが、子どもたちの未来に影響を与えるという視点が共有されました。

また、学生が実際に参加しているこの会議そのものに意味があると感じている大人が多かったことも印象的でした。

今後、より多くの場で学生の声が届けられる取り組みを増やしていくこと、そして分野を超えてつながる機会を継続的に創出していくことが、新たな所沢として子ども環境に大きな影響を与えていくと感じられました。